

総合コメント1(国際シンポジウム
中国都城考古学の最前線3
——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展
——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 董, 新林, 佐川, 正敏, 陳, 穎, 楊, 雪雁 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000324

総合コメント 1

董 新林（中国社会科学院考古研究所第三研究室・主任）

はじめに

まず、コメンテーターとして、共同研究の双方の代表である谷口満先生と朱岩石先生にお招きをいただき、深く感謝したい。中国社会科学院考古研究所と東北学院大学アジア流域文化研究所の共催による第3回国際シンポジウム『中国古代都城考古学の新進展3』は、「秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展」というテーマで、中日の研究者が二日間にわたり活発な討議および有益な意見交換を行い、大きな成果を上げることができた。

秦漢時代の都城と地方城市の研究は、中国の歴史時代の考古学において最も重要な内容の一つである。考古学の発掘調査を長年指揮されてきた9名の先生方は、秦漢時代の都城と地方城市に関する考古学上の新発見と新進展を詳しく紹介した。ご参会いただいた皆様方も、十分に豊かで厚みのある学術成果を享受されたことと信ずる。

1. 秦漢都城遺跡の調査と研究

今回のシンポジウムに当たり、まず秦漢都城遺跡を対象にして、つぎの3名の研究者が報告した。

劉振東氏は「秦漢都城の時代性－漢長安城を中心に－」で、秦都咸陽城、前漢長安城、後漢洛陽城がいずれも旧城を利用して再築したもので、ある程度戦国時代の都城構造の影響を受けながら、秦漢都城の時代性を形成したと指摘した。都城の時代性とは、時代とともに変化する社会政治的、経済的、文化的な要素が都城制度にも反映されているということを示し、それは一般的な表現では「継承と創出の統一」である。継承とは、前代の都城要素を借用あるいは継承することで、都城の通時代的な共通性が存在する。創出とは、継承という基礎の上に改造や革新を行うことであり、これによって都城の個性が形成された。劉振東氏は、考古研究所漢長安城工作隊が1956年に成立してから60年間の考古学的調査・発掘、および研究によって獲得された輝かしい成果を基礎として、全面的な報告を行っており、漢長安城が都城の造営技術、都市の規模、「城中城」という都城の配置型式、城外の郊区、城郊の祭祀システムと空間という5つの側面において、それぞれ都城の時代性を反映するものであると述べた。漢長安城遺跡の研究がこれまでの成果を踏まえていかにさらに進展していくか、大いに期待するところである。

劉瑞氏は「秦漢櫟陽城の考古学的発見と研究」で、戦国秦の献公2年（紀元前383年）から孝公12年（紀元前350年）までのおよそ34年間、櫟陽が秦都であったと指摘した。そして、長安城の建設が完成する前の短期間、櫟陽城は前漢の都城だった。劉瑞氏は、櫟陽城の新発見と研究の歷程について紹介した。1980年に中国社会科学院考古研究所が設置した櫟陽考古隊は、櫟陽城遺跡（すなわち一号古城）で二年間ボーリング調査と発掘を行った。2012年に中国社会科学院考古研究所と西安市文物保護考古研究院が共同で新たに櫟陽城考古隊を組織し、ボーリング調査と発掘を現在まで継続し、一連の大きな成果をあげてきた。その結果、櫟陽城遺跡の範囲をほぼ確定した。さらに、一号古城の再調査を基礎として、二号古城が前漢武帝から前漢末期の漢代の城跡であること、三号古城の上限時期が戦国時代中期を遡らず、戦国秦の櫟陽城であること、その下限時期が前漢前期までで前漢初期の櫟陽城でもあることを確認した。したがって、櫟陽城の考古学的調査は三号古城に集中することになった。2017年以来、三号古城の北城壁、西城壁を探り出し、大型建物跡を10基発見した。そして、櫟陽城跡には南北方向の軸線が存在することを初歩的に確認し、宮城区域内で「後宮」区を識別できた。また、三号古城の南側で工房区を発見した。これらはともに重要な考古学上の新発見である。しかし、櫟陽城三号古城の城壁の範囲を確定する必要があり、城内における配置や一号・二号古城との関係をさらに究明する必要がある。

劉濤氏は「後漢洛陽の南北宮に関する試論」で、後漢洛陽城の研究の現状についてまとめ、後漢洛陽城が現在確認できた北魏の内城にあたること、東・北・西面の城壁が残存していること、平面が長方形であ

ることを指摘した。後漢の12基の城門の多くは、魏・晋・北魏代に継続して利用された。南宮と北宮は、後漢洛陽城内の主な宮殿区である。近年、後漢北宮の南城壁と西城壁に関わる遺構の手掛かりが若干発見された。北魏太極殿とその東堂の北側の下部では、曹魏代よりも古い版築遺構が発見されて、これが後漢の北宮と関係あると推定されている。このほかに、漢・魏・晋代の太倉跡と南郊礼制建築遺跡の新発見もある。劉濤氏は先行研究と考古学の新資料に基づいて、北宮と南宮の範囲を推定した。このような推測的な研究は、考古隊が発掘作業中に後漢洛陽城の遺構と新旧関係などの状況を意識しながら識別することに対して、重要な基礎資料を提供している。同時に、このような推測的な考えも、考古学的新発見の蓄積によって検証する必要がある。

2. 秦漢時代の地方と匈奴の城跡などの調査と研究

本シンポジウムでは、5名の中国の研究者と1名の日本の研究者が、秦漢時代の地方の城跡、および匈奴の城跡などの考古学的発掘と研究の新進展について紹介した。各報告に関わる地理的な範囲は非常に広く、東は福建省武夷山市城村漢城から西は新疆ウイグル自治区奇台县石城子遺跡まで、そして南は雲南省昭通県朱提故城と広西チワン族自治区の秦漢城跡の研究から北はオルドス地域の前漢時代の大型穀物倉庫跡の成果までが取り上げられた。とくに、臼杵勲氏はモンゴル国とロシアにおける匈奴の土城跡と集落遺跡の発掘と研究の新しい成果について紹介しており、本シンポジウムの内容を充実させた。

樓建龍氏が「福建省武夷山市城村漢城遺跡における2022年度の発掘成果」で紹介した城村漢城遺跡は、武夷山世界遺産の一部である。城村漢城は、秦漢時代の百越地域にある20個余りの城跡の中で、規模が比較的完全に保存された諸侯王城である。1958年以来、この地域に対し継続してボーリング調査と重点的な発掘調査が行われ、城壁、城門、宮殿、工房、墓などの遺構が発見され、また大量の土器、瓦磚、銅・鉄器などの遺物が出土し、そして二冊の発掘調査報告書(1980-1996、1997-2020年武夷山城村漢城遺址発掘報告)が出版された。2022年に発掘された杉樹下遺跡では、西門外において城跡の西部道路と水系、防衛施設を確認するという学術目的を基本的に達成した。今後の発掘調査に対して助言を述べたい。城跡の分布を深く知り、城内の機能区分などを探究することを巡っては、5ヶ年の考古学的調査計画を立て、城村漢城遺跡の考古学的調査に関する掘り下げた研究を計画通りに進めることが、もっとも良い。

田小紅氏は「『漢并天下 海内率服』—新疆ウイグル自治区奇台县石城子遺跡の発掘と研究」で、紀元前60年に匈奴日逐王が漢王朝に降伏し、漢王朝が西域に西域都護を設置したことにより、西域が正式に漢王朝の政治的版図になったことを指摘した。奇台县石城子遺跡は、漢王朝が西域に構築した軍事防衛システムにおける重要な要塞である。2014～2019年に新疆文物考古研究所の発掘調査によって、遺跡の東側が城跡であり、西側が手工業工房区と墓地であることが分かった。城跡は内外二重構造である。外城の平面はほぼ長方形を呈し、北側と西側に城壁を築き、東側と南側は深い谷を障壁とした。内城は、外城の西・北面城壁を利用して建設し、東面城壁はまだ残存しているが、南面城壁はすでに削平された。全城内の最高地点は北東隅にある。城跡の城壁は版築で造られたものである。城門は一基だけ設置され、西面城壁の中部に建てられた。この城跡は目下、新疆地域において、典型的な漢代の瓦磚が大量に出土した唯一の遺跡である。発掘した研究者は、この城が『後漢書』に記載されている疏勒城跡と考えている。これは新世紀に入ってから、中国新疆考古学における重要な新成果の1つである。

謝広維氏は「広西チワン族自治区秦漢時代枡形基壇式城跡の発掘結果と初歩的理解」で、広西チワン族自治区の北東部ですでに17の秦漢時代の城跡を発見したが、北西部では発見できなかったと指摘した。これらの秦漢城跡は郡城、県城、関城および軍事上の城跡に分類することができ、それらの規模は郡城で周長約1000mと通常やや小さいものとなる。また、謝氏は城跡を平城、山城、山を削った城に分類し、その中で「山を削った城」を枡形基壇式城跡と呼んでいる。枡形基壇式城跡は小型の城跡で、その四周には環濠か自然の谷地を利用したものが巡らされるが、城壁は見当たらない。今まで5ヶ所、つまり武宣の勒馬漢城、南寧の三江坡漢城、龍州の庭城、平樂の河口漢城、賀州の高寨城跡である。謝氏はこれら5つの城跡の形状と構造を紹介し、その年代と性格を分析し、併せてこれらの城跡の特徴を導き出した。謝氏

は、勅馬漢城には官衙区があり、そこから後漢時代の「中溜丞印」などが出土しており、文献史料と結び付けて、この城跡が秦漢時代の中溜（溜）県城であると推定した。庭城遺跡は前漢の雍鶏県と雍鶏関の遺跡である可能性が高い。高寨城跡は南越国の時代の蒼梧王の王城、および前漢武帝が南越を平定したあとの封陽県城である可能性がある。これらの新発見は我々の秦漢城跡に対する知見を深めた。

楊勇氏は「雲南省昭通市朱提故城遺跡の調査と試掘」で、まとまった新しい成果を紹介した。朱提故城遺跡は雲貴高原で数少ない比較的よく保存された漢晋時代の城跡の1つであり、おそらく漢晋王朝が現地に設置した朱提県（或いは郡）の治所であった可能性があり、当時の西南夷（南中）地区の重要な政治、経済そして文化の中心であったと考えられる。2022年から中国社会科学院考古研究所は雲南省文物考古研究所などの機関と共同して、朱提故城遺跡に対してはじめて試掘調査を行い、学術目標を以下のように明確に設定した。すなわち、遺跡の範囲を確定し、城壁の範囲と堀の状況を理解し、そして城壁と堀の構築方式と創建・修復・存続の状況を解明することである。その結果、重要な収穫を得ることができた。楊勇氏は城跡を遺跡の重要な構成部分の1つ、すなわち当時の官衙区に違いはないと考えている。遺跡の東側の前河に近いところで、大量の鉍滓（スラグ）を発見し、ここが主に金属製錬を主とする手工業区であることを確定できた。遺跡の南側は政治的機能のある建物跡が存在した可能性がある。この調査は始まったばかりであるので、継続することが必要であり、それによって早急に遺跡の配置と機能的区分を明らかにし、遺跡の創建と廃棄された年代などを確定する必要がある。

張文平氏は「オールドス地域の前漢長城沿線で見つかった大型穀物倉庫跡」で、長城沿いのフフホト市の沙梁子古城にある大型穀物倉庫跡の考古学的発掘の状況について紹介した。この建物跡は城跡の中部に位置し、軸線が北西から南東方向で、版築成基壇建物であり、基壇の平面は長方形で、東西長が約170m、南北幅が約20mある。建物跡の四面には版築成の壁があり、間口は16間で奥行2間である。この遺構は前漢武帝の時期に造営されたはずであり、前漢中後期の建物で、大火災で廃絶したと考えられる。張氏は、この穀物倉庫がおそらく国家級の倉庫であり、長城沿線に軍糧を供給するための倉庫と推定している。これは、沙梁子古城の遺構分布や性格を知る上で重要な手がかりを提供した。

白杵勲氏は「モンゴル・ロシアにおける匈奴の土城・集落遺跡の発掘と研究」で、モンゴル国とロシアで発見された匈奴時代の土城跡と集落遺跡に関する研究の概況を紹介した。白杵氏は、匈奴の土城・集落遺跡の分布・分類・機能、土城遺跡の設計と規模、そして今後の課題という観点から論述し、我々のモンゴル高原の匈奴に関する考古学的資料に対する知見を深めた。

おわりに

都市考古学の発掘と研究において重要な点は、どれが重要な発見であるかということだけではなく、その調査の方針と方法、つまり都市の配置や沿革についていかに新しい知見を得るかがさらに重要である。要するに、以上の9つの報告は皆すばらしい内容であり、コメントーターのコメントも相当な内容に達していたので、非常によい勉強になった。参加者の皆様もきっと同じように感じているはずだと思う。最後に、9名の報告者と5名のコメントーター、そして参加者の皆様、さらには主催者の皆様、翻訳や通訳に尽力された皆様に心から感謝の意を表したい。

翻訳：佐川正敏（東北学院大学・教授）、陳穎（東北大学文学研究科・大学院生D3）、楊雪雁（東北学院大学文学研究科・大学院生M2）共訳